新年の誓[[1]](#footnote-1)

香山光郎（李光洙氏改め）

はふことをれます。それは、は、いもので、々誓りにならないからであります。はもつては、もその誓をりました。のつたは誓をつたとじだらうとひます。

誓をてゝ、それをりし、ひくやうなはからたらいのやうにはれます。誓にも々ありませう。さまののもありませう。またしたの誓もありませう。そのいづれにしましても、誓をてすとふことは、にかしい、いことにありませぬ。

し誓は、によつてするとはれてります。の御加持で、その力、力にたよつてしげるとふことであります。のはから一つのをつた々であつたやうであります。とふことばのひなには、とつてもひませぬが、のがくあないでせうか。のであるところの、あるをじ、それをたよることであります。これがなのです。こののにたよるにあらざれば、した誓でも、々しせるものではないとじます。

であるから、はのての誓のたるにしつてくじ[、]でもじ[、]でもじ[、]にいても幸にても信じつて、わがのするてのことはそれがであれであれ[、]わがのにするのななることを信ずることをひたいといます。

そして、がへ、ひ、ふてのはをばしること、ちのにふことでなければなりませぬ。これがなのです。はにつたきをしなければなりませぬ。にれたに、もはやにははないのです。のあるのみです。しかもそのとふのはをするのでありませぬ。になればにです。ところ[が]、こゝにふところのとは、へてへば、きひしのをすることでありまして[、]りくへば、へのりのないのことであります。

はくははの一年をして、にふ一年であらせいとひいのであります。きなこと、いことなど、なんかにはないでありますが、せめて、の一年、にいても、にしてもにしても、らぬ々にしてもにはなりたくない、そしてこの[の]が、せめてな、はをすやうなものではありたくない、とふのであります。

1. 『國民新報』1940年1月7日 [↑](#footnote-ref-1)